

駱駝

「皆様、毎度お騒がせしております。毎度おなじみのラクダ屋で御座います。御家庭内の御不要の物、高値で引き取らせて頂きます。」

明るい陽光の降り注ぐ平日の昼下がりの住宅街、人通りも少ない街路をスピーカーからのどかな声を上げて廃品回収の軽トラックがゆっくりと通り過ぎて行く。

「おい！ガラクタ屋！」

前方の瀟洒な住宅の扉を押し開いて、男がこちらに向かって手を振っていた。

お客だ！車を進めながら廃品回収業の個人経営者である佐藤は相好を崩した。今日は朝からトラックを走らせながら最初の客であったのだ。

男の待ち受ける家の前に軽トラックを横付けした。

家は周囲より嵩上げした地盤の上に建つ南欧風の明るい色の二階家で、外構は白い石積み of 塀で囲われており、塀と建物の間には良く手入れされた木々が植えられていた。

大金持の豪邸とまでは行かなくても、敷地の広さや家の大きさから、このあたりでは、かなり生活に余裕のある家庭の住居と見られ、何かお値打ちな物が手に入るのでは無いかと期待した。

「ガラクタ屋！こっちだ！」

扉を半開きにしながら男が身体を乗り出して手招きした。

男の風貌に佐藤は違和感を覚えた。

歳の頃は40台初め位であろうか。長身と言う程では無いが、体重の有りそうなガッチリとした筋肉質の身体に、はち切れるように半袖のポロシャツを纏っていた。

この辺の住宅街の主人はたいていローンに追われて疲れた表情を浮かべるサラリーマンであり、まるで格闘家の様なオーラを発する男に奇妙なものを感じていた。

第一この時間に家に居るのは、たいてい主婦か幼い子供位であり、働き盛りの大の男が家に居るのは奇妙に思えた。何かの自由業か有給休暇中なのかといふかった。

「こっちだ、こっちだ」

男が手招きして迎え入れた。

「はい、失礼します。」

道路に面した短い石段を登り、両開きの鋳物の門を開いて、男に誘われるまま玄関に足を踏み入れた。

天窓から陽光の降り注ぐ玄関は明るい色の壁紙と黒いタイル張りの土間のモノトーンで構成され家人のセンスの良さが伺われた。広い玄関で靴を脱ぐと男に案内されるままに廊下を進んだ。

「こっちだ」

男が廊下の突き当たりのステンドグラスをあしらった木のドアを開けた。

ドアがパッと開き室内の様子が目に入った途端、佐藤の顔に驚きの表情が浮かんだ。

そこは20畳程の洋間であったが、部屋の中のテーブルやソファなどの調度は隅に追い遣られ、衣類や寝具の様な物が辺り構わず散らかされていた。

その様子はこれまで通って来た綺麗に整理された家の中の様子とは余りに違っていた。

そして、更に佐藤を驚かせたのが、部屋を中心に若い女が一人呆然と立ち尽くしていた事だった。

歳の頃は20代の終わりか30代初めぐらいであろうか？テレビドラマの主演女優のような品の良い色白の細面の美形で栗色に染めた長いソバージュヘアが良く似合う美人であった。

上品な仕立ての濃い紺色のスーツがまるでモデルの様なしなやかな身体の線を強調していた。

女は思い詰めたような青ざめた表情を浮かべ、瞳を閉じて俯^{うつむ}いていた。

佐藤は驚きを浮かべて、しばし、部屋の中央に正立する美女を見詰めていた。

「おう！ガラクタ屋！買って貰いたいのはこれだ！」

男が無言で佇む女を指さして声を上げた。

「さあ！さっさと服を脱ぐんだ！どうせお前には不要な物^{モノ}だからな！」

固く目を閉ざしていた女の青白い顔に一瞬羞恥の色が走り、何か哀願する様に男の方を濡れた瞳で見詰めたが、男の強い眼光に気押された様に、小さくひとつ息を吐くと静かにスーツのボタンに小さく震える指をかけた。

突然の事態に、目の前で何が起きているか理解出来ず啞然と立ち尽くす佐藤の目の前で、女は次々とボタンを外していった。

濃い色のスーツの上で、か細く震える女の白くて細い指先が目には焼き付いた。

男から無言の威圧を受け、女は上着を脱ぎ捨てた。

上等なジャケットが足下にパサリと落ちた。

佐藤の目の前には、白いブラウスとタイトな濃紺のスカート姿のモデルのようなプロポーションの女が立ち尽くしていた。

男が顎をしゃくって早く脱ぐように促した。

羞恥に身を染めながら男の威嚇を受けて、スカートのホックに指をかけた。

豊かに張った腰の線に沿ってスカートがゆっくりと滑り落ちていった。

白いブラウスの陰から女らしい丸みを帯びた、しかし、無駄肉の無いムッチリと成熟した艶めかしい大腿が見えた。

スカートを脱ぎ捨てる際に、ブラウスの陰から、黒いガーター止めのストッキングを履いている事が判った。そして黒いレースのパンティが一瞬垣間見えた。

「さあ！早くブラウスも脱ぐのだ！」

突然部屋に呼び込んだ見知らぬ男の前に裸身を晒す羞恥に身悶える女の長袖のブラウスの下から黒のストッキングを履いた均整のとれた長い脚がずっと延びていた。

「もう、お許し下さい・・・」と、小さく女が呟いた様に聞こえたが、男は無視して無言で視線を浴びせた。

男に哀願しても無駄な事を覚ったように、女は羞恥に貌を染めてブラウスのボタンを外し始めた。

ブラウスの前を開いた時、パンティとお揃いの黒いレースのブラジャーをしている事が判った。

薔薇模様の刺繍が入った黒いブラジャーは女の白く豊かな胸の間に深い切れ込みを作り、Dカップはあろうかと思われる乳房を形良く覆っていた。

無駄肉の無い腹部の中心には可憐な左右対称の形の良い縦長の臍の窪みが見え、そこから下腹にかけて滑らかな筋を描く様にして黒い扇情的なパンティの中に消えていた。

そして、その下のぴったりと閉じられた両太腿の付け根当たりが柔らかくこんもりとした盛り上がりを見せているのが薄い下着越しに窺われた。

白い細身の身体であったが、女性らしさを誇示するように、優美な曲線を描く胸部と腰部を強調するような黒い下着を纏っただけの女体は、男の本能を呼び覚ますようであり、目の前に供せられた半裸体に、事の異常さを忘れ、魅入られた様に見取れてしまっていた。

佐藤の熱い視線に気付いたのか女は両手で胸を覆い、脚をくねらせて股間を隠そうとした。

「おう！ガラクタ屋！これでいくらだ？」

男が脱ぎ捨てられた服を足下に投げ付けて来たので、ハッと正気に返った。

これは、この世の事か？この不気味な男は凶悪な犯罪者で、自分は何かの重大な事件に巻き込まれてしまったのでは無いかと思った。

全く面倒な事に巻き込まれたものだ！こんな所に長居しても碌な事はない！兎に角この場は男の希望する通り、女の着ていた服を買い取り、一刻も早くここから逃げ出すしか無いと考えた。

床に腰を降ろして、スーツを鑑定し始めると日頃の職業が戻った。

衣類は販売が難しいため、引き取らない事が多いのであるが、この場は男の言う通り買い取らざるを得ないと覚悟した。

スーツを手にするると確かにブランド物の服であり、シミやほつれも無く、流行のデザインであるため、転売は容易であると思われた。

まだ肌の温もりを残すブラウスも同じくシルクのブランド物であり、買って損はしないと思われた。

「そうですねえ・・・二千元で如何ですか？　－　アイタ！！」

値踏みをする佐藤の背後に立っていた男が突然頭頂部にゲンコツを叩き降ろした。

「馬鹿野郎！これだけのブランド物のプレタポルテだ！二十万はするだろう！さっき不要品を高値で買い取ると言っていたじゃないか！」

「ひええ～！そんなご無体な！」

いきなり男から殴りつけられ、ジーンと痛む頭を撫でながら悲鳴を上げた。

佐藤にしてみれば、この謎の男の機嫌を取って早くこの場から立ち去るため、日頃の買い取り価格よりも破格な値を付けたつもりであったが、男の剣幕に恐れをなした。

「こうなったら仕方無い！おい！その下着も脱ぐのだ！」

二人の目の前に直立し、ぼんやりと成り行きを見詰めていた女に怒鳴るように声を浴びせた。

青ざめた表情を浮かべていた女の顔が見る見る紅潮していくのが見えた。

しかし、男の命令には逆らえないのか、全てを諦めきった表情で背中に両手をまわした。

ブラジャーのホックが外されると、表面を覆っていた固い殻を弾き飛ばすように白い柔ら

かな乳房が現れた。

これまで拘束していたブラジャーを押し退ける様に豊満な形の良い乳房がプルンと現れ、その先端には薄い桜色した乳首が姿を覗かせていた。まるでプリンの様に柔らかそうな紡錘形の乳房は、男達の目にさらけ出すように前に飛び出し、大きな乳房の自重を受けても垂れてはいなかった。

男に急き立てられ、次に黒いショーツに手を掛けた。

女性らしい柔らかなラインを描く、良く張った腰の線に沿って、ゆっくりと降ろしていった。

血走って見詰める佐藤の目にはまるでスローモーションの映像の様に映り、白く盛り上がった下腹の下端を占めるなだらかな丘から両脚の付け根にかけて、まるで夢の様な黒い繁茂が、谷間を覆う儚い霞の様に覆っているのが映じられた。

そして、片脚を上げて腰の周りを隠していた下着を抜き取る時に、微かに開いた大腿の間から鮮やかなピンク色の秘肉が窺えた様に感じられた。

男の視線を避けるように窮屈な姿勢で、上体を屈めてガーター留めされたストッキングを脱ぎ降ろす時、シミひとつ無いまるやかな白い尻の形が目に焼き付いた。

男から殴られた頭の痛みも忘れて、美女の脱衣ショーを魅入られた様に見詰めるのだった。

「どうだ！これだけの美女のシミ付きパンティまでおまけに付けるんだ！二十万でも安過ぎる位だろう！」

男は脱ぎ捨てられたばかりの、まだ女の体臭を留める様なショーツを引ったくると、股間に接していた部分を佐藤の鼻に力一杯グリグリ押し付けながらほざいた。

「ひえー、払います！払います！どうかご勘弁して下さい！」

男の暴力に圧倒され、堪らず悲鳴を上げた。

男は佐藤の返答に気を良くして、顔面に押し当てていた下着を外して、ニヤリと笑みを浮かべた。

これ以上、此所に居たら何をされるか判らないと恐怖を感じて、慌てて仕事道具の入った手提げ鞆から現金をつかみ取ると男に渡した。

佐藤から現金を受け取った男は指を嘗めて札束を数えながら、満足げな笑みを浮かべていた。

一刻も早く此所から逃げ出さなければいけない！と、買い取った服を両手に抱えて、慌て

て立ち去ろうとする佐藤に、「ちょっと待て！」と男が声を掛けた。

まだ何か？ぞっとする思いで後ろを振り返った。

「こんな服を20万円で買って貰ったんだ！此奴^{こいつ}がお礼したいそうだ・・・」

「なあ、そうだろう？」

男は全裸にされたまま、床に正座し、固く両手で胸を押さえて羞恥に前屈みの姿勢で佇む女に声を掛けた。

「このガラクタ屋はな！お前の臭い下着を20万円で買って下さったんだ！お前もお礼しないと心残りだろう！」

男は膝を固く閉じ、両手で胸を隠しながら少しでも男達の視線を隠そうと身体を折る女にたたみ掛ける様に声を掛けた。

男の威嚇に怯えたように、固く閉ざしていた目を開けて、ドアの前に棒立ちになる佐藤に震える声で、「お願いします・・・お礼をさせて下さい・・・」と、小さく口にした。

潤んだ瞳でじっと上目遣いに見詰められ、微かな甘い声音で囁きかけられ、背中にゾゾッとするモノを感じ、まるで金縛りに遭ったように戸口の前で硬直した。

状況に気を良くした男はニヤニヤ笑いながら、背後から佐藤を押して、女の方に連れて行った。

「ほら！礼の言葉はどうした！」

激しい声を浴びせられて女は、「この度は私の服を買い上げて頂き、有り難う御座いました・・・」

と、正座の姿勢のまま三つ指を着いて深くお辞儀をした。

頭を床に着くまで下げたので、何も身に着けていない臀部が持ち上がり、見下ろす佐藤の目に優美で肌理細かいまるで陶磁器の様な白い尻が見えた。

「いえいえ・・・お礼なんて！」

異様な展開に、土下座する女に慌てて声を掛けた。

「・・・お礼に心ばかりのご奉仕をさせて下さい。」

女のどうにもならない悲しみと羞恥を含んだ甘い声音にゾッとするようなモノが背骨を走り抜けた。

「此奴はな！尺八を吹かせても大した腕前なんだぜ！」

土下座する女の前に佐藤を立たせて、男は得意げにうそぶいた。

突然の異常な事態に恐怖を覚え、女の前でガタガタと腰を^{ふる}わせた。男が後ろから支えていなければ、そのまま倒れてしまいそうであった。

上目遣いの潤んだ瞳で佐藤の顔を直視しながら、怖ず怖ずと両手を伸ばしてきた。

上から見下ろす佐藤の目に^し沁みるような妖しい官能美を持った熟れた桃のような乳房が映った。

女は両手を佐藤の腹の方に伸ばすと作業ズボンのベルトを緩め始めた。

「いけません！奥さん！」

佐藤が焦って声を上げた。

そんな佐藤の^{うろたえ}狼狽ぶりにも関わらず、女はベルトを外し終え、ゆっくりとズボンをズリ下げた。

膝までズボンを降ろされ、安物のブリーフが現れた。

「駄目です！奥さん！駄目です！」

目の前の謎の美女に薄汚れた下履きを目視される事に羞恥を覚え両手でパンツの上を押さえた。せめて新品のブリーフを履いてくるんだったと後悔した。

女は表情を変えず、優しく佐藤の手を退かせると、慈しむようにブリーフを降ろしていった。

「ああっ・・・」生暖かい優しい女の指先を下腹に感じて奇妙な呻き声を上げた。

今や、濃密な恥毛が剥き出しとなり、恐怖と緊張で収縮した陰茎がジャングルの様な下腹の毛の中に縮み込み、その先端だけが陰毛の間から見え隠れしていた。

女はじつりと濡れた瞳でそれをじっと見詰めて、まるで黒い土の中から芋を掘り出すように、白くて細い指先で、濃い恥毛を掻き分け、それを露わにした。

「いけません！奥さん！汚いです！」

40過ぎまで女っ気の丸で無い独身男で、せいぜい週に2～3回シャワーを浴びる程度の無精男の垢じみたそのモノに女の指先が触れてきて、叫ぶように裏返った声を発した。

佐藤の滑稽なまでの狼狽ぶりも気にせず、陰毛の中から引き出したそれに、鼻先を近づけて、腐臭の様な、その濃厚な男性器の発する強い臭いにウットリした表情を浮かべた。

不快な臭気を帯びた肉塊に軽く鼻先を擦り付けたり、指で抱えて慈しむ様に頬ずりを繰り返した。

見ず知らずの男に対する破廉恥な行為は女の羞恥心を刺激し、それが内なる昂奮を呼び起こすのか、何時の間にか女の頬は熱く紅潮し、ジットリと汗ばんだ熟成美をたたえた媚め

かしい身体からは、高貴な香水の甘い匂いと官能を刺激する脂粉の香りが起ち昇って来て佐藤の鼻腔を捉えた。

女の暖かく火照った柔らかな頬に摩擦され、佐藤の股間にビリビリと激しく電流が流れ続けた。

緊張で萎縮仕切っていたそれは次第に硬度を持ち始めていた。

肉厚の唇をうっすらと開き、舌先を出すと、不潔なその部分の先端に触れてきた。

「駄目です！奥さん！汚いです！汚いです！」

女の舌先を敏感なその部分に感じて大声を上げた。

女の柔らかな舌先で愛撫されながら、こんな事なら日頃から綺麗に身体を洗って、良い匂いでも染み込ませておけば良かったーと、後悔した。

女は、しなやかな両手の指使いで、良く動く舌先を蠢かせ、時々鼻先や頬をそれに軽く触れさせて刺激を与え続けた。

女の熟達した技に曝され、いつの間にかウワッ、ウワッと、意味不明な呻き声を上げ始めていた。

懷に余裕のある時に、たまに利用する安い風俗店では経験した事の無いような快美感が腰を貫いた。

女の技巧の前に佐藤の男は硬度をグングンと増し、陰毛の中から雄々しく突き出していた。

「ガラクタ屋！お前結構立派なモノめーを持っているじゃないか！」

後ろから見物していた男が面白そうに声を上げた。

女の唾液と男の鈴口から滲み始めた先走りの粘液にヌラヌラと濡れ輝るそれを認めると、女は大きく口を開けて口の中に含んだ。

暖かく潤った女の口の中を感じて、佐藤の口から空気が抜けるような声が上がった。

女は頬を窄めて、音をさせながらそれをしゃぶり続けた。

最早、後ろから支えていなくても大丈夫だろうと思った男は、二人だけ自由にさせて佐藤の手提げ鞆を探った。

「おい！ガラクタ屋！お前こんな美女におフェラされた経験は今まで無かったろう！記念に写真を撮っといてやるぜ！」

手提げ鞆の中からスマホを見つけて、カメラモードにして二人の痴態の方に向けた。

佐藤は、男からカメラで撮られている事は意識出来たが、謎の美女の卓越した口技の前に

気もそぞろとなってそれどころでは無かった。

今まで女にモテた経験の無い風采の上がない中年男で、この歳になるまで自分の性処理は風俗かエロ本やアダルトビデオを見ながらのオナニーしか無かった佐藤にとって、謎の男から揶揄された通り、醜女や身体線の崩れた娼婦しかいないような安い風俗店では、お目に掛かることは絶対にあり得ない若い美女から、これまで経験した事も無い程の卓越した口技でしゃぶり上げられ、女が口に含むその部分からは絶え間なくビリビリと電流が流れ続け、その際どい快美感が腰をブルブルと震わせ、そのまま燃えさかる火炎の様な刺激となって脊髄を駆け上がり、脳髄を痺れさせていた。

「アアーッ！止めて下さい！奥さん！出てしまいます！」

女の超絶した口唇による技巧の前に、たちまち自失状態に追い込まれ、眉根を寄せて最後の瞬間を堪えた。

女は見知らぬ男に口を使って愛する事に、最初の羞恥も忘れた様に顔を真っ赤に染めてウッ、ウッと鼻を鳴らして激しく責め立てた。

「アアーッ！駄目です！出る！出る！」

腰を振り立てて女の口から逃れようとするのを、そうはさせじと佐藤の下半身を両手でグッと抱きしめて尚も激しく搾り上げた。

陰茎の付け根まで睾丸が迫り上がり、そのまま女の口腔内に発射するのは時間の問題であった。

佐藤は両手で髪の毛を掻きむしり、その瞬間を堪えようとしたが、

「ああ〜もう駄目！出る！出る！」と一声叫ぶと、白目を剥いて女の口内にまるで濁流が堰を切るようにぶち撒けた。

それは、かなりの間、女を買う機会も無く、自慰もしていなかったため陰嚢内に溜まりに溜まっていたものであったが、女は佐藤が放出した大量の精液にウッと声を上げ一瞬たじろいだ様子を浮かべ身体を硬直させたが、直ぐにゴクゴクと喉を鳴らして口内に放出された腐臭を放つものを飲み下していった。

女に精を搾り取られて、佐藤はヘナヘナと床に尻餅を付いた。

そんな佐藤の股間に顔を埋めたままの女は、優しく舌先を蠢かせて男の肉棒を洗い、頬を窄めて尿管に残った精液を吸い上げた。

女の手管の前に絶頂を極めた佐藤は口を半開きにして荒い息を吐きながら放心し陶醉の表

情を浮かべていた。

そんな佐藤の痴呆の様な顔を男はスマホのカメラで次々と撮影していった。

女が口を離しても、唾液に濡れ光るそれは天を剥きピクピクと痙攣を続けていた。

男はスマホを近付けるとその様子もカメラに収めていった。

放心状態にあった佐藤が次第に冷静さを取り戻していくのを見届けた男は、

「どうでい？俺の言った通りこの女は大したモンだろう。」と、頬を歪めて笑いかけた。

「どうでい、ついでにもう一つ頼まれて呉れないかい？」

男は何やらカラー印刷された紙を手話しかけた。

その印刷物の上にペンで丸印を書いて、佐藤の方に放り投げた。

それは、大人の玩具のカタログであった。

「これから、一っ走りしてその丸印を降った物を買って来てくれないか？」

見るとディルドウやバイブレーターや禍々しい玩具の上に印が降られていた。

困惑の表所を浮かべる佐藤に、「嫌かい？嫌だと言うのならお前のスマホのアドレスにある全員にさっきのお前のアへ顔を送ってやるぜ！」とスマホを手を振りながら脅しつけた。

「ひえー！それだけのご勘弁して下さい！」

女との痴態を撮られた写真を送られたら世間に顔向け出来なくなるーと、男の陰険さに恐怖を覚えた。

「タダとは言わねえ、こいつを呉れてやるぜ！」

男は傍らに転がっていたハンドバックを手にとると佐藤に向かって放り投げた。

それは新品なら200万円以上する中古の捨て値でも50～60万円以上するブランドのハンドバックであった。

男に追い立てられる様に使い走りに出された佐藤は、軽トラのハンドルを握りながら、独り言を繰り返していた。

「これは犯罪では無いのか？」

「哀れなあんな女は男から脅されてあのような事をしたのでは無いのか？」

「このまま警察に駆け込んだ方が良いのでは無いのか？」

「しかし、犯罪だという証拠は在るのか？」

「それに自分の恥ずかしい写真を撮られている。あんな物を世間にばら撒かれたら明日か

ら商売が出来なくなる。」

「世の中には自分の妻の恥ずかしい姿を第三者に晒して快感を感じる変態夫婦は居ると言うが、あれもそんな夫婦では無いのか？」

車を運転しながら千々に考えは乱れた。

「ああー今日は全くの厄日だ！あのヤクザ者の様な乱暴な男に20万円もふんだくられて！・・・しかし、冷静に考えてみればこのハンドバックが手に入ったなら、男から頼まれた買い物分と併せても充分におつりが来るはずだ！」

胸の中でソロバンを弾きながらニヤリと唇を綻ばせた。

「それに・・・」

女から与えられた目眩く刺激が心地良い記憶となって股間からゾクゾクと込み上げて来るのであった。

「・・・あの美女のおフェラは凄かったな・・・」

その時の情景が鮮烈に蘇って来て、口元がイヤらしく歪んだ。

自分の意思とは別の強制されたこととは云え、まるで桃源郷を彷徨う様な陶酔感にどっぷりと浸った甘美な回想と共に股間がジワジワと熱を帯び始めるのであった。

車を運転しながら片手でいまだに心地良い疼きを残す股間を撫で擦った。

そうこうしている内に軽トラはアダルトショップの前に着いた。

この歳まで女と縁の無かった佐藤にしてみれば、アダルトショップなど、たまにエロ本を買ったりオナニーのグッズを買ったりする程度で、男性器を模した玩具など購入した事は無かった。

慣れない売場の商品棚から禍々しい性具を探し出して、それを手にしてジッと見つめた時、何故か心臓が妖しくときめいた。

店の主人にも手伝って貰い、何とか、男から指示された物を全て買い揃えた。

大量の荷物を抱えて、あの邸宅に戻った。

玄関の鍵は開いたままで、内に入ると、「おう！遅かったな！さっさとこっちに來い！」と、奥から男の太い声がした。

先ほど女から目眩くような快美感を与えられた洋間のドアを開くと、男は素っ裸になり柔らかな革張りのソファの上にドカリと腰を降ろしている様子が目に入った。

そして、その男の開け放たれた股の間に顔を埋めて女が口で奉仕をしている様子が目に映った。

女は相変わらず全裸のままで、ガッチリと麻縄で後ろ手に縛り上げられ、その余った縄は前に回され豊満な乳房を搾り上げているものと思われた。

両膝を床に着き前屈みの姿勢で男の股間に顔を埋め、その三点で体重を支えている事が判った。

佐藤が部屋に入ってきたのも気付かないのか、全身汗まみれになり一心不乱に男のモノをしゃぶり続ける女のムンムンとする肉付き豊かな白い尻が佐藤の方に、まるで見せつける様に突き出されていた。

官能的に盛り上がった美しい曲線を描く白い尻肉の間に、あから様にさらけ出されたサーモンピンクの秘園とセピア色をした菊花が佐藤の目に鮮烈に焼き付いた。

普通の女なら恥ずかしくて男の目に晒す事が出来ないような二つの恥孔が、後ろ手に厳しく縛り上げられ、手で隠す事も叶わずマザマザと男の目の前にさらけ出されていたのだ。

その淫惨な光景に眼を奪われながらも、怖ず怖ずと両手に提げた紙袋を男に差し出した。

男は口唇を使った愛撫を続けさせながら、満足げに袋を開いて一つ一つ取り出して中身を検めた。

「おい！これから浣腸をする。準備しろ！」

野太いガラス製の浣腸器を箱から取り出して、上機嫌で撫で回しながら男が命令した。

「か、浣腸ですか？」

ゴクリと喉を鳴らして哽れた声を発した。

男は無言でグリセリン液の入ったガラス瓶のキャップ部分を摘まんで目の前でヒラヒラさせた。

先ほどはポロシャツに隠れて判らなかったが、裸になった男の肩や大腿には鮮やかな刺青が彫り込まれていた。

この男は暴力団員か何かに違いないーと思い、背すじにゾッとするものが走った。

相変わらず女に口で奉仕させている男の指示に従い、床にビニールシートを敷き、洋間と続きになっているキッチンから持ち出した鍋と洗い桶をその上に並べた。

一心不乱となって男のモノに奉仕する女の蠱惑的に蠢く尻の傍に置いた鍋にペットボトルの飲料水とグリセリン原液をドボドボと流し込み、男に言われるままに浣腸液を作った。

これからこの部分にガラスの浣腸器を突き立てられ、この怪しげな液を注ぎ込まれるんだと思うと、浣腸液を作りながら、目の前に咲く清楚に佇む野菊の様なセピア色した部分をじっと見詰めた。

夜一人自分を慰めながら見るエロビデオでは、女に浣腸するシーンは度々見たことがあるが、ガラス製浣腸器を手にしたことも、ましてや、生身の女に浣腸した経験は無かった。それが、男から強制されての事とは言いながらも、妙齢な女性に自らの手で浣腸することになり、あまりの緊張感で、心臓はバクバクと脈を打ち、頭の中は真っ白となり、身体はブルブルと慄え、口の中はカラカラになっていた。

200cc 入る大きなガラス製浣腸器に調合したての液をなみなみと吸い上げると、「奥さん！勘弁して下さい！」と、男の無言の威圧に気押されて、震える手付きで女の尻にその先端を突き立てようとした。

「馬鹿か？お前は！」

「あ痛たた・・・」

緊張のあまり汗を滴らせながら、女の尻に密着して浣腸器を突き立てようとする佐藤の頭に、女に咥えさせたままの男が身体を伸ばしてゲンコツを振るった。

男に殴られて痺れる頭を撫でる佐藤に、

「こんな硬いガラスの管をいきなり刺したら、其処が切れてしまうだろう！ワセリンを使え！」と、怒鳴りつけた。

内から込み上げる不可思議な衝動に急き立てられるまま、いきなりその部分に浣腸器を突き立てようとしていた佐藤は男に殴られて、自分は何をしていたんだろうと、ふっと我に帰った。

そして、普段の小心な廃品回収業のオヤジに帰った佐藤は、震える手でチューブから半透明の軟膏状の白ワセリンを右手の中指の上に絞り出した。

ワセリンを塗した指が女の汚辱の部分にそっと触れた時、上気した肛孔の熱気が震える指先に伝わって来た。

半透明の油脂でヌルヌルする指が女のその部分の中心を捉え、女はウッと呻いて背中をビクッと硬直させた。

何かを言おうとするかのように、男のモノから口を外し振り返ろうとするのを、男は長い髪を鷲掴みにして、再び咽の奥深くまで突き立てた。

ワセリンを塗した指が秘められた菊の座に触れる度にビクリビクリと反応を繰り返す女の様子に、「奥さん、許して下さい！奥さん、許して下さい・・・」と、念仏の様に唱えながら額にビッシヨリと汗を浮かべ、目を血走らせてその部分を凝視しながら指先を匍わせた。

「そうだ・・・そのまま皺の一本一本を伸ばすように塗り込めて行くんだ・・・お前、中々上手じゃ無いか・・・」

女の咽深く突き立て、喘ぐような鼻息をさせながら男は佐藤に指示を送った。

緊張感で額に玉の汗を浮かべながら、男に命じられるままに、皺の一本一本を揉みほぐすようにマッサージを続けた。

羞恥に双臀は赤く染まり、佐藤の揉みほぐすその部分は益々熱く熱を帯びて来る様子が、指先から伝わって来た。

最初は男の命令といえど、可憐な女の恥ずかしい箇所を辱めると云う罪悪感に苛まれ、謝罪の言葉を口にしながら恐る恐る其処に触れていた佐藤であったが、佐藤の指先に鋭敏に反応し身悶えを繰り返す女の様子を目にする内に、不可思議な雲の様なものが頭の中を覆い始め、理性や倫理観と謂ったものを包み隠し、痺れる様な快美感が脳中を支配して行くのであった。

次々と込み上げる官能の濃密な雲に覆われ、最初の頃の不潔な排泄孔に触れると謂う恐れと嫌悪感は消え失せ、その部分から伝わってくる熱気に浮かされる様に夢中になって指を匍わせた。

最初に絞り出したワセリンは全て肛口の周囲に塗布されてしまい、更にワセリンを指先に絞り出すとマッサージを続けた。

当初は佐藤の指先を嫌悪するように硬く閉ざしていた禁断の門であったが、執拗なマッサージを受け続ける内に次第に柔らかく緩み始めている事が判った。

今やワセリンを塗された指先の感触を期待するかの様に、その部分の輪状の筋肉がピクピクと蠢いていた。

佐藤が指を匍わせる直ぐ下の女の最も女で在る部分がじっとりと潤い始め、濃厚な磯の匂いにも似た体臭が漂い始め、佐藤の鼻腔をくすぐった。

閉ざされていた秘裂が薄く開き、サーモンピンクの華麗な襞の間からツと愛液が一筋下方に滴り落ちた。

女はこんな所でも感じるのか？と女体の驚異を見る思いで目を見張った。

いまや佐藤の脳裏は不可思議な衝動にジーンと痺れ、額に汗を浮かべたまま一心不乱に指先を這わせ、血走った目で、柔らかな尻肉の間に妖しく咲く陰花を見つめていた。

不意に指先が滑って菊花の中心を貫いて体内に潜った。

男のモノを口腔で愛撫する女は、一瞬ウッと呻き声を上げて背を逸らし、反射的に輪状の筋肉をグッと絞った。

その心地良い締め付けと^{たぎ}滾るように熱い内部の妖しげな感触に、不潔な部分に指を押し入れているという理性も忘れ、もっとその内部を楽しみたいという欲望が沸き上がって来た。惚気たような表情で女の肛門を割って指を突き立てている様子に気付いた男は、「そうだ、そうだ、内側からもマッサージしてやれ・・・」と声を掛けた。

若い美女の秘所を存分に騷るという現実離れした事態に、今や日頃の小心さも忘れ桃源郷を彷徨う様に夢見心地に浸ってしまった佐藤は、男の声に励まされ、更にワセリンを塗りとくり、骨張った指をその狭い通路に出し入れし、指先を曲げて柔らかく熱い内部の感触を楽しんだ。

指を根元まで押し入れた時、指先に固形物が触れるのを感じた。

「それだけ柔らかく^{ほぐ}解せば充分だろう・・・始めろ・・・」と、醒めた声で命じた。

何か判らない背徳的な行為への期待感が心の奥から込み上げて来て、男の声に突き動かされる様に、再び鍋の中に浣腸器の筒先を浸して透明の液を吸い上げた。

200cc なみなみと満たして、女の柔らかく膨らんだその中心に深々と嘴管を突き立てた。その瞬間ウッと呻き声が上がって背筋を硬直させた。

浣腸器のガラス製のピストンを押して出ると、まるで魔法の様に透明な液が体内に吸い込まれていった。

腸管を内部から責め上げる圧力に抗するように下腹をビクビクと震わせ、額にびっしょりと汗を浮かべ、男の怒張を口にしたまま、ウンウンと鼻を鳴らし続けた。

浣腸液を注ぎ続ける佐藤も額にビッショリと汗を浮かべ、ハアハアと荒い息を吐きながら、この変態行為に没入していた。

すっかり空になった浣腸器を女の肛口から乱暴に抜き取ると、荒々しい劣情に突き立てられるかの様に、再び先端を鍋の底に沈め、浣腸液を吸い上げた。

立て続けに4回浣腸され、腹の中には都合800ccの浣腸液が注入された事になる。下を向く女の下腹が心なしか膨らんだ様に感じられた。

5回目に浣腸器を突き立てたところ、内部から強い圧力を感じてピストンを押す手が止まった。それでも力尽くで半ばまでピストンを押し込んだ時、肛口と嘴管の隙間から激しく液が溢れ出し、浣腸器を握り締める佐藤の手を濡らした。

「全く此所の緩い女だな！」

女から口腔を使った愛撫を堪能しながら、男が呆れたような声を出した。

「しょうがないな・・・こいつで栓をしておけ・・・」

と買って来たばかりのアナルプラグを手渡した。それは、スペード状の断面をした最も太い部分は5センチ以上在りそうな黒いゴム製の責め具であった。

ガラス浣腸器の嘴管で蹂躪された所を更に巨大な淫具を突き立てろーとの命令に心臓がどきりとした。

一体全体、こんな太いものが入るのか？といぶかりながら、その先端を体内に注ぎ込まれた薬液を漏らすまいとピクピクと収縮を繰り返す菊花の中心に押し当てた。

プラグの底の平たくなった部分に掌を当ててグッと押して出ると、まるで魔法の様に花卉が柔らかく開き、ジワジワとそれを体内に受入始めた。

プラグの最も太い部分が通過する時、激痛を覚えたのかウッ声が上がったが、瞬間でそこを通過して、プラグの底の平たい黒い円形部分が双臀の間に残るだけとなった。

「どうだ？ウンコしたいんだろう？早く俺をイカせるんだ！俺がイクまでウンコをさせてやらないからな！」意地悪く女に命じた。

先ほどは、たちまち佐藤を自失に追い込んだ見事な女の口技であったが、この男は何度も男女の濃密な性愛を経験して来たのか、額に汗が浮かび始め、呼吸が荒くなって来たとはいえ、まだ自失する様子は無く女に啜えさせ続けていた。

腸内の強烈な圧力にアナル栓が押し出され、周囲の肉を伴って迫り出してくる事があったが、佐藤は男から命じられて、その都度、無理矢理栓を腸内に押し戻した。

女は腹を内部から搔きむしる激痛に全身に水を浴びたように汗を滴らせ、下腹を悶えさせていた。

ギョルギョルと下腹から鳴り響く音が男達の耳に聞こえた。

断末魔の苦痛に喘ぐ女は、一刻も早くこの責め苦から解放されたく、顔を真っ赤に染めて激しく頭を振って、男の怒張を吸い搾り上げた。

女の切羽詰まった攻撃に、流石に男も自失の間際に迫られ、額に汗を浮かべ眉根をグッと寄せてその瞬間を堪えた。

まさにどちらが先に陥落するか男と女の真剣勝負であった。

互いにハアハアと荒い息を吐き、息詰まる攻防に佐藤も煽られていた。

激しく蠢かす下腹の動きに負けないように、凄まじい腸内の圧力を受けて今にも飛び出して来そうな肛門栓を必死になって押さえ込んでいた。

栓とそれをピッチリと喰い絞める輪状の筋肉の隙間からジワジワと腸内液が滲み出し、強い臭いを持った褐色の汚水が双臀の狭間を濡らしていた。

突然男がウッ！と声を上げて身体を硬直させ、次にビクビクと下半身を痙攣させた。

女は今にも失神しそうな形相で白目を剥いたまま、本能の命ずるままに口内に放出された大量の体液を飲み下した。

佐藤の押さえ込む栓も今や限界に達していた。佐藤の力に抗して、その部分は内側から捲れ上がり、ジュウジュウと音をさせて褐色の液を溢れさせていた。

最早限界と知った佐藤は傍に置かれていた洗い籠を手にとると女の下腹にあてがった。

その瞬間女の尻穴が爆発した。

アナルプラグに扼されていた狭い隙間からは大量の液状化された便が噴出し、飛沫となって背後の佐藤の顔や手や衣服に噴き掛かった。

アナルプラグは吹き飛ばされ、佐藤の捧げ持つ洗い籠の底に激しくぶつかる音がした。

それに続いて大量の軟化した便が濁流となって洗い籠の中に流れ込んだ。

女の放出した汚物の強烈な臭いで部屋中満たされて行った。

佐藤は顔と言わず上半身と言わず、全身に女の尻から飛び散った汚濁の飛沫を浴びていたが、拭う事も無く、目を爛々と輝かせて美女の脱糞姿を見詰めていた。

洗い籠の半分近くにドロドロとした便が溜まっていた。

最早腹中に放出する物も無くなったのか下腹の痙攣も収まってきた。

まるで浜に打ち上げられた魚が口をパクパクするように、未だ女の肛口は開いたり閉じたりを繰り返していたが、たまに激しかった崩壊の名残を留める様にドロリと最後まで腸内に留まっていた残滓を流し出す事はあったが、それ以上の排泄は無かった。

男は柔らかなソファに上体を預け、天井を見上げる様にハアハアと息を吐いていた。

女は精魂尽き果てたのか男のモノを口に収めたままグッタリと崩れていた。

激しかった性衝動から回復して来た男は、佐藤の身体が女の身体から噴出した汚物により転々と褐色のシミを浮かべている様子に腹を抱えて笑った。

「どうでい、こんな美人でも下の穴からひり出すものは臭いだろう？」

と、部屋中に充満した悪臭に辟易とするように大声を発した。

「ほらほら、シャワーでも浴びてその糞を洗い流したらどうだ。ついでに女も洗ってやれ！」
女も自らが流した濁液により会陰の周りや大腿を濡らしていた。

洗い籠の中に溜まった大量の汚物を便所に流し、ビニールシートを畳んで室外に放り出してから、男に教えられた通り、グッタリとする女を抱きかかえて風呂場に向かった。

女の両手は後ろに縛り上げられ、豊満な乳房を搾り上げる様に胸の上下を縛っていた麻縄はそのままであった。

あのヤクザ風の男の許しを得ない内に縄を解いたらどんな叱責を受けるか判らないと怯え、女には可哀想だが、固く縛り上げたままにしておいたのだった。

それに縄に自由を奪われた状態の方が女の哀れさを感じられ、凄まじい崩壊の場面を目撃し、いまだ生々しい衝撃に支配されている佐藤にはこのままにしておいた方が好ましく感じられた。

風呂場の広い脱衣室に置かれた洗濯機の中に汚れた衣類を投げ込み、素っ裸となった。

脱衣所に設置された洗面台の大きな鏡を見て、あの凶暴な男と比べて、やせて肋骨の浮き出た自分の身体はなんて貧相なんだろうと感じた。そして、ちらっと垣間見た男の怒張と比べ自分の物はなんて小さいのだろうと溜息を吐いた。

風呂場は建物の南東の隅に在り、大人二人がゆっくり漬かれそうな大きな浴槽とそれに応じた広い洗い場があった。

浴室の二面は大きなガラス窓となっており、明るい外光が浴室の隅々まで照らしていた。

窓は出窓構造となっているため浴室の広さが強調される感じであった。

二面の窓に備え付けられたブラインドは上まで一杯に持ち上げられていたが、庭の樹木と高い塀により外部から覗かれる心配は無かった。

未だ意識が混濁状態に在る女を洗い場のタイルに敷かれた大きな滑り止めマットの上に横たえ、先にシャワーを使った。

女から浴びせかけられ、乾いて瘡蓋の様になっていた汚物の塊が一つ一つ剥がれて足下の

排水溝に流れ去っていった。

未だに現実の事とは信じられず、ぼんやりとした法悦境に中に浸っている佐藤は、女から浴びせられた排泄物を何故か不快な物とは感じてい無かった。

そこいらの醜女ぶおんなから汚物を浴びせられたら、悲鳴を上げて逃げ惑う所だろうが、佐藤とは全く住む世界が全く違う、浮き世離れした美女の身体から産み出された排泄物を何か神々しい下され物のように感じていた。

汚物の悪臭も凄艶な崩壊のシーンを目の当たりにして、いまだに没我の境地に浸る佐藤には高貴な香料の芳香のように感じられた。

皮膚から剥がれ落ち、排水溝に吸い込まれていくそれを不思議な物を見るような目で眺め続けた。

自分の身体に付着した残滓を洗い流した佐藤は次に女の身体にシャワーを掛けた。

上品にこんもりと茂った陰毛に付着した汚物を丹念に指で掻き分けて洗い流した。

洗い易いように女の股間をこじ開けると未だに意識の薄い女は、むずかるような甘い声を発したが、拒絶する様子は無かった。

むしろ、股間を流れる心地良いお湯の温度にウットリとしているように感じられた。

そのまま、女の身体をマットの上で俯せにひっくり返すと、シャワーで流しながら、二つの尻肉を掴んで左右に大きく押し広げた。

女は再びむずかるような声を上げた。

ついさっきまで暴れ狂っていたその部分は、今は恥ずかしげに閉じ、清楚な菊の蕾に戻ってひっそりと閉じ合わされていた。

佐藤の指や浣腸器の嘴管やアヌスプラグで散々蹂躪された場所ではあるが、そのような激しい狼藉にもかかわらず変形すること無く、美しく整った放射状の皺を描いていた。

その可憐なすみれ色の花卉をじっと見つめる内に、それを愛おしく感じる気持が込み上げて来て、悩ましく誘惑する媚口に口付けしたい衝動に駆られた。

夢見心地のまま、まるで花に吸い寄せられる昆虫の様に、フラフラと花芯に唇を近づけたが、女の股間から起ち昇る体温を感じると、ふと我に帰り、最後に残された理性がそれを押し止めた。

佐藤はスポンジにボディソープを垂らし、女の汚濁に塗れたその部分を丹念に洗ってやっ

た。

意識も朧な全裸の女と浴室に二人だけとなって、流石に小心の佐藤も男の本能が沸々と沸き上がって来た。

凶暴な男の目が無いことを良いことに、時々指で女陰を開き繊細な襞を剥き出しにして洗ったり、石けんでヌルヌルする指先をアヌスに突き立て、こじ開ける様に中の様子をうかがった。

全ての汚物を排出し終えたのか、秘められた排泄孔の中には汚物の欠片も無く、濃いピンク色の粘膜を晒していた。

佐藤の指の悪戯に次第に意識を取り戻しつつあるのか女がイヤイヤと呟く様に口にし、身体をくねらせた。

その動きは逆に男の劣意を掻き立てるように扇情的に映った。

佐藤はソープで経験したボディ洗いをこの女に対してやってみたくなった。

洗面器で大量の泡を掻き立て自分の身体に塗りたいくった。

そしてマットの上に仰向けに横たわる女の身体に覆い被さって行った。

石けんの泡を通して摩擦し合う肌の触れる感触に得も言われぬ快感を覚えた。

前に突き出た弾力のある乳房が佐藤の痩せた身体を擦った。

二つの身体に挟まれ、その先端に在る乳首が硬く勃起していくのが判った。

佐藤は激しい快感に勃起した自分の乳首と硬く^{しこ}固った女の乳首を絡め合った。

次々と襲い来る快感の嵐に女の意識はすっかり回復したようであった。

自分の目の前に佐藤の顔を見て、一瞬驚愕の表情を浮かべた。

そして、男に襲われる恐怖に顔を歪め、上から身体を密着させる男の重さを撥ね除けようと身体をくねらせた。

覆い被さる自分の身体の下で恐怖と嫌悪の表情で身悶える哀れな女を目にして、一体自分は何をしているのだろう？このままでは自分も暴行犯になるのでは無いか？と、白々と自意識が蘇って来た。

そして、女の上に馬乗りになったまま、「奥さん、お許し下さい！奥さん、お許し下さい！」と、顔面蒼白となって詫び続けた。

「おい！楽しんでいるか？」

突然声を掛けられ、男が風呂場の扉を開けて立っているのに気付いた。

男は相変わらず全裸のままであった。

肩から腰回りに掛けて見事に彫り込まれた刺青が威嚇的に映った。

そして、股間から垂れ下がった巨大な男のモノが此处では誰が支配者であるかと主張しているように見えた。

男はバスマットの上に女を組み伏せる佐藤の様子をニヤニヤと笑みを浮かべて見下ろしていた。

「この女はな！尻の穴を使わしても大したモンなんだぜ！一度試してみたらどうでい。」

男の言葉に、指先で秘孔を抉った時の柔らかく暖かい肉の感触や浣腸器の嘴管を突き立てた時の反応やアヌスプラグを押し込んだ時それを押し返そうとする強い圧力などが艶めかしい記憶となって蘇って来て、股間に何か熱いものが流れた。

これは何かの犯罪かも知れないと恐れていた佐藤であったが、最早自分もこの犯罪の中にどっぷりと嵌まってしまい、抜き差しならない状態に追い込まれてしまったーと感じた。そして、この謎の男に見つめられている今の状況では自分は逆らうことは出来ないと観念した。

それに、更に先ほど見せ付けられた凄まじい行為に触発された荒々しい男の淫欲が再び脳内を支配し始めていた。

こうなったら毒を食らわば皿まで！ーと、捨て鉢な勇気が込み上げて来た。

マットの上に横たわる女の身体に手を掛けて、無理矢理俯せの体勢にさせようとした。

男達のやりとりで、次は自分の後口が犯されると覚った女は恐怖に顔を引き攣らせ、佐藤の手を拒んだが、それは激しい抵抗では無く、何処か諦めを含んだか細い抵抗であった。誘うような女の弱々しい身悶えに佐藤の劣情は更に掻き立てられた。

佐藤の眼前には後手に縛られたままの全裸の女がバスマットの上に俯せで横たわり、石鹸水に濡れてヌラヌラと輝る撓わな丸みを帯びた双臀を曝していた。

その扇情的な姿は佐藤の劣意に火を点し、いきなり両手を左右の尻たぶに伸ばすと、思い切り押し広げた。

男の野卑な視線に秘め所を目撃される羞恥に女は短く悲鳴を上げ、身体をくねらせた。

ガッチリと両手で双臀を押し開いたまま、女のか弱い抵抗を封じ、その良く張った肉の丘に挟まれた谷間の奥の狭小な平原を熱い目で見詰めた。

それは、アルプスの山奥に僅かに拓いた草原を連想させ、其処に咲く清楚な菊の花がまる

で誘うように息づいていた。

これまで、佐藤は女と後口で交わった経験は無かったが、夜一人慰める時にオカズにしていたエロ漫画やアダルトビデオで一度はアナルセックスをしてみたいと願望を持っていた。日頃の小心さも忘れて、背徳の欲望に疼く佐藤の分身は硬くいきり立っていた。

既に石鹸の泡で滑りが良くなっていたその周囲をせかせかとマッサージし始めた。

突然ウッ！と女が苦悶に顔を歪めた。

佐藤の指先がスルリと内部に侵入したのだった。

その燃えるような内部の熱さに、佐藤の良識は吹き飛んだ。

先ほど脳裏に過ぎった、女のその部分に口付けしたいという願望が蘇って来た。

忙しなく腸内を掻き回していた指をどけると、女の双臀を思い切り押し上げ、その深奥に顔を埋めた。

秘められたる花芯に突然唇を押し当てられ、ウッ！と女が声を上げた。

海の底に棲む軟体動物の様に柔らかな花卉に口付けたまま、舌を伸ばして放射状に広がった皺の一本一本を丁寧に舐め上げた。

佐藤の舌先の動きに、女の腰がビクリ、ビクリと痙攣していた。

まるで齧り付くように臀丘の間に顔を埋め、貪る様に熱気を込めてアヌスを嘗める佐藤と、それに鋭敏に反応する女の様子に、じっと見つめる男がホウと溜息を吐いた。

舌による執拗な愛撫を受ける内に女の菊花の中心部が柔らかく開き始めていた。

窄めた舌先が狭い入口を押し開いて内部に侵入した。

男の舌先を排泄孔に感じて、異様な感触に女の身体が慄えるように身悶えた。

戦慄く女の腰を押さえ込むようにして、更に深く舌を腸内に押し入れた。

精一杯伸ばした舌で、女の直腸内を嘗め回した時、独特のエグ味を帯びた味覚が舌を刺激したが、それすらも今の佐藤には甘美な味覚に感じられ、その美味さに酔いしれた。

謎の男の無言の威圧と、謎の美女の蠱惑的な、その秘められた花に虫が吸い寄せられる様な妖しげな魔力と、五感を刺激する艶めかしい女の身体の温もりや匂いや味覚が渾然一体となって佐藤の脳裏の襲い掛かり、これまで決して表に現れることの無かった獣性が頭の中で一機に渦を巻き、激しい渦巻きの中に揉み込まれ頭の中は真っ白となり、突然、発狂したような奇声を発して女に武者ぶり着いた。

イヤーッ！と鋭い悲鳴が上がり女が身体を硬くした。

いきなりその部分に硬く屹立した肉塊を押し当てると、腰に力を込めてグッと押し出した。肛口の狭い筋肉の輪を押し広げて男の熱くて硬いものが押し入ってくる感触に、組み伏せられる女の口からアッ！アッ！という呻き声が上がった。

それに併せる様に、狭い肉の管へ自分の熱く滾ったモノを挿入する激烈な感触に佐藤の口からアーッ！アーッ！と叫び声が上がった。

激悦な感触に浸りながらとうとう付け根まで埋め込むことに成功した。

女の強い括約筋が佐藤の怒張の根元をギリギリと痛いほど絞め上げ、膣孔とは違った生々しいスベスベした感触の腸管が妖しく亀頭部を刺激した。

これまで経験したことの無い目眩く快美感に我を忘れて浸った。

浴室の戸口に立ったまま男は、佐藤に下敷きにされて背後から田楽刺しにされる女と、女の身体の上に覆い被さったまま歓喜に腰を振り続ける佐藤の演じる男女の痴態を目を細めて眺め続けた。

そして、肉欲に狂い激しくアエギ声を上げる忘我の境地の二人にノソッと近づいた。

マットに横たわり痴態に耽る二人の身体に手を伸ばすと、そのまま、後ろで一つに繋がったままの二人の身体をひっくり返した。

今、佐藤の身体が下になり、その腹の上に後手に縛られた女を乗せ上げる形となった。

僅かに開いた大腿の奥に佐藤の陰茎が女を後から刺し貫いている様子がありありと見えた。

佐藤が突き立てる菊座の蕾の僅か上に佇む陰花が、うっすらと花卉を開き、蜜を溢れさせている様子が目に映った。

男はバスマットの上に膝を降ろすと、女の両足首を握り絞め左右に思い切り押し開いた。

男は無言で猛々しく屹立した肉塊をその部分に押し当てた。

薄い肉の壁一枚を通して、男の巨大なモノが分け入ってくる圧力を感じて、佐藤の分身が女の腸内で爆ぜた。

「いやー！旦那は羨ましいね！こんな良い女をオモチャに出来てさ！」

すっかり酔いの回った佐藤が男の手にする氷を満たしたグラスにウィスキーを注ぎ入れながら大声を上げた。

自分の衣類を洗濯乾燥機に放り込んだまま乾燥が終わるのを待つ佐藤は全裸であり、隣で酒を煽る男も相変わらず全裸のままであった。

良く空調されたりリビングに居り酒の酔いも手伝って寒さを感じることは無かった。

酒盛りをする二人の目の前にはボンデージスーツで嚴重に拘束され床の上で身悶え続ける女の姿があった。

細い黒革のベルトを格子状に組み合わせた様なボンデージスーツは女の胸を根元で搾り上げ、形の良い大きな乳房を扇情的に前に突き出させていた。

そして、股間をきつく一文字に割るベルトにより、前と後ろの二つの秘孔に深々と埋め込まれた野太いバイブレーターが飛び出さないように押さえ込まれていた。

黒革の手枷足枷に取り付けられた金属錠同士を鎖で繋いで固定され、身動きも出来ず板敷きの床の上に横たわっていた。

口にはテニスボールほどありそうな大きなボールギャグがねじ込まれていた。

二人はバイブレーターから延びたリモコンを時々操作しては、女の身悶えぶりを肴にして酒を煽り合っていたのだった。

ボールギャグに声を奪われた女が時々恨めしげに二人の方を睨み付けたが、女の潤いを帯びた瞳で見詰められる度に何か痺れる様なものが込み上げて来た。

酒好きの佐藤であったが、日頃は安い缶チューハイか発泡酒くらいしか呑むことが出来なかった。

それが、初めて口にする高級ウィスキーの芳醇な香りとまろやかな味覚に酔いしれ、欲するままに次々と喉に流し込み、すっかり上機嫌となっていた。

何かの犯罪に巻き込まれ凶悪犯の片棒を担がされているのでは無いだろうかという恐怖心は酒の酔いにすっかり押し流され、男と一緒になってリモコンを操作して身悶える女の姿に嬌声を発したり、この様な美女を自由に玩ぶ男を羨む言葉を発したり、この様な感激を味合わせてくれた男に感謝の言葉を発したり、お世辞を言ったり、酔いで呂律の回らなくなった口から次々と喚き上げていた。

男が、「ちょっと飲み過ぎたな・・・トイレに行ってくる」と口にして、ノソリと立ち上がった。

そのまま、酔って覚束ない足取りで女の方に向かって行った。

女の目に見る見る恐怖の色が浮かんで来た。

男はボンデージスーツで拘束され身動き出来ない女の上体を起き上がらせると、女の頭の後ろに手を回して口を嚴重に封鎖していたボールギャグを解き始めた。

巨大なボール状の箆口具が取り除かれ自由になった口で新鮮な空気を吸い込むようにハアと大きな息を吐いた女であったが、男の意図を察知して直ぐに固く口を結んだ。

そんな女の仕草を目にして薄笑いを浮かべた男は、意地悪く指で女の鼻を摘まんだ。

息苦しさには耐えられず大きく口を開いた瞬間に男は自分の分身を女の中にねじ込んだ。

ボンデージスーツに拘束され身動きの出来ない女の上体を引っ張り上げて、横座りの姿勢を取らせたまま男は自らの緊張を解いた。

女が目がかッと見開き、ウッと唸ったが、女の長い髪を驚掴みにした男は、深々と刺し貫いたまま、膀胱内に溜まりに溜まったものを流し続けた。

声を塞がれた女の喉が激しく上下するのが分かった。

「そうだ・・・^{こぼ}溢さず飲み込むんだ・・・」

女の口内に排泄を続けながら男が、「ふう・・・大分溜まっていたぜ・・・」と、下腹の内側から込み上げていた膨張感が解放される快感に、うっとりとするように口にした。

「どうだ、お前もこのトイレを使うか？」

と、女の口内に酒臭い汚水を注ぎ込みながら、佐藤の方を振り向き淫靡な笑みを浮かべた。何時果てるとも知れない陰惨な景色を目の当たりにしながら佐藤の意識が薄くなっていった。

肌寒さを憶えて目を覚ました。

酒の酔いも手伝って泥睡していた佐藤の目に部屋の窓から陽の光が差し込み、もう朝かと微睡みながら思った。

まだ覚醒仕切らない佐藤は、股間のモノが痛いほど硬化し、上を向いているのを感じた。こんなにカチカチに朝立ちするなんて、昨日見たスケベな夢が余りにリアルであったからだな・・・と、思った。

昨日から目の前に起こったことは、とても現実には有り得る話とは信じられず、やはり夢であったのだ！と、酒の酔いの残る身体を起こしながら首を激しく振って思った。

目が覚めて本来の小心な男に戻った佐藤は周囲の様子を見回して愕然とした。

其処は夢かも知れないと思った淫猥な行為に耽った洋間そのままであり、自分も全裸のままであることが判った。

「よう！目が覚めたか！」

聞き覚えのある暴力男の太い声が響いて来た。

声の方に目をやると、あの男と女の姿があった。

男は Tシャツに半ズボンを着ていたが、女は全裸のままで、後手に縛られ、白く細いうなじには犬の首輪が巻かれていた。

そして女は、リビングに張り渡されたロープを股の間に挟んでいたのだった。

女の股間をまるで黒い靄の様に儚く覆った春草の下から垣間見える女の割れ口をピンと張り詰めたロープが深々と挟り、柔らかな二つの肉の丘陵の間に没していた。

固く張られたロープには所々結び目が作られており、首輪に結びつけられたリードを男から引かれて、女は部屋の端から端まで張り渡された瘤付きロープの上を歩まされていたのだった。

股間を搔きむしる、毛羽立ったロープの荒々しい感触に耐えきれず、女は悲痛の表情を浮かべて時々立ち止まるのであるが、男は手にした短い鞭で女の尻を叩き、首輪に結びつけたリードを邪険に引いて、歩みを続けさせるのであった。

「どうだ！面白いだろう？今、此奴に朝の散歩をさせているところだ！」

男が佐藤の方を振り向きながら笑い上げた。

男の暴力に曝され、更に何度も忌まわしいロープの上を往復させられた後、男は部屋に張られていたロープを緩め、「部屋の中だけじゃつまらないだろう！これから外に散歩に連れて行ってやるぜ！」と、言い放った。

続いて男は、呆然とその様子を見つめる佐藤の方を見て、「お前も一緒に来い！」と、有無を言わせぬ調子で声を掛けた。

全裸のまま屋外に引きずり出されると云う羞恥に恐怖したように女は顔を青ざめさせたが、男は構わず、後手に縛り上げていた縄を解き、床の上に押し倒すと犬の様に四つん這いの姿勢を取らせた。

そして、首輪に付けられたリードの端を握り絞め、グイッと引っ張って犬のようになった女に歩行を促した。

男は佐藤に向かって一緒に来るんだ！と言うように目配せをした。

男の圧倒的な暴力の前に無力さを痛感している佐藤はフラフラと立ち上がると二人の後に従った。

洋間の掃き出し窓を開けて、庭の芝生の上に出た。

誰かに裸の姿を見られるのでは無いかという羞恥と恐怖に女の身体が強張った。

それは、全裸のままの佐藤も同じであった。

男は首輪の紐を引いて芝生の上を犬の様に女を数周引き回した。

その二人の後を股間を手で押さえ前屈みの姿勢で小刻みな内股で歩く佐藤が従った。

成熟した女が演じる犬の散歩に満足したのか男は首輪を引くのを止め、「さあ！此処で犬み
たいに小便をして見ろ！」と命じた。

人間の尊厳を踏みにじるような命令に、女の顔にサッと羞恥の色が走った。

しかし、この凶暴な男に逆らう気力は喪失してしまっているのか、四つん這いの姿勢のま
ま怖ず怖ずと片脚を持ち上げ始めた。

「もっと高く脚を上げないと股を濡らしてしまうだろう！」と言う男の激しい声を受け、
憤怒と羞恥を堪えてブルブルと脚を震わせながら更に開いていった。

男が良いと言うまで高く上げて、犬の排泄の姿勢を取らされた。

佐藤は自分の羞恥も忘れてこの扇情的な景色に見入った。

「さあ、良いぞ！始めろ！」男が冷たく命じた。

ふいに開ききった股間から一条の黄色い水が流れ出た。

先ほど荒くれたロープで股間を責め立てられ、腫れ上がった秘肉に小水が滲みるのか、女
はエンエンと泣きながら排泄を続けた。

羞恥と苦痛に顔を赤く染めて泣きながら排泄する女の凄まじい姿に、自分の羞恥も理性も
忘れて、その淫靡な光景を目に焼き付けようと、飛沫が掛かるのも忘れて芝生に這いつく
ばって女のその部分を見上げる佐藤であった。

「腹が減ったな！何か作れ！」

部屋の中に戻った男が女に命じた。

女は項垂れたまま、無言でキッチンに立つと、裸身の上から赤いエプロンを羽織り、昨日
浣腸液を調合した鍋に水を張りガス台に置いた。

豊満な胸の端がエプロンからはみ出し、背を向けた時には^{たわ}撓わに実った白桃の様な尻が剥
き出しとなった。

全裸でいるよりもエロいなーと、男達は台所で立ち働く女を好色な目で見詰めながら思っ
た。

女は無言のまま、沸き立ったお湯でスパゲティを茹で、ボンゴレを作って二人に供した。

二人は女の調理したスパゲティ・ボンゴレの旨さに舌鼓を打った。

食欲を満たした男は、次に性欲を満たそうとするかのようにテーブルから立ち上がった。

台所に立つ女の背後に近づくと、女の両手首を掴み自分の方に引き寄せた。

「さっきのボンゴレはアサリの煮汁が滲みてて美味かったぜ！今度はお前のハマグリを吸わせて貰うぜ！」と、背後から身体を密着させて、淫靡な笑みを浮かべながら女の耳に注ぎ込む様に口にした。

背後から両手を握り絞められ、イヤイヤと拒絶の態度を示す女を佐藤は、ただボーと見ていた。

天井から吊り下げられたロープに女は再び全裸にされ立位で縛り付けられていた。

麻縄で両手を背後に高手小手に縛り上げられ、余った縄で形の良い乳房の上下を二重三重に縛り、紡錘形に見事に張った乳房を搾り上げていた。

佐藤にも緊縛を手伝わせ、ようやく縄止めを終えた男が出来映えに満足したように手を叩いて、「今度は俺がお前の大蛤を料理してやるぜ！」と、得意そうに笑い上げた。

「蛤のむき身を作るためには、先ず脚を開いて貰わないとな・・・」

女の足下に腰を屈めた男は女の足首に縄を結びつけながら言った。

その言葉に、天井から吊り下げた縄により後ろ手のまま立位で固縛されガックリと肩を落として俯いていた女が、男の方を振り向いて顔にサッと羞恥と憤怒の色を走らせた。

「そら出来た！ガラクタ屋！お前はこちらを引っ張れ！」と、女の足首に結んだ縄を佐藤の方に投げて寄越した。

自分はもう一方の縄の端を掴むと、佐藤に思い切り引くように命じた。

最初この家を訪れた頃は、粗暴な男から受ける暴力に対する恐怖や倫理観やこの謎の女に対する同情の様なものを感じ、積極的に女体責めに加わる気にはなれない佐藤であったが、女に対する度重なる暴虐を目の当たりにして、次第にその様な意識は痺れたように働かなくなり、頭の片隅に追い遣られて行くように感じた。

そして、この成熟した美女に哀れみを掛けるより、この謎の男と一緒に苦悶する姿を目撃したいという暗い願望の方が強くなっていった。

女の両方の脚に結びつけられた縄を左右から引かれて、女は拒むように股をすぼめた。

「こら！何を頑張っているんだ？」

両脚を開かせまいと、股間に精一杯の力を込めて抵抗する女に男が声を掛けた。

それでも左右から縄を引く男の力には抗し切れず、女の股間はジワジワと開き始めた。

アッ、アッと短い悲鳴を上げ、拒み続けたが、男二人の力の前には所詮儚い抵抗でしかなかった。

佐藤は羞恥に身悶える女の抵抗を楽しむ様に縄を引き続けた。

部屋の隅に縄止めを済ますと、全裸のまま人の字型に股を広げさせられた犠牲^{いけにえ}の姿を繁々と見詰めた。

大きく左右に広げさせられ、艶めかしい秘められた女の花園を慎ましやかに隠す、まるで白い肉の谷間に掛かった黒い霞の様に覆う春草を優しい朝の光が柔らかに照らし上げていた。

開股した女の前に男がドカリと胡座を組んで座った。

男が指を伸ばして下草に触れた途端女の身体がビクンと小さく痙攣した。

女の反応も気にせず男は女の秘められた毛を擦り続けた。

しなやかな毛先を揃えるように撫で付けたり、毛根部分から掻き上げ逆立てさせたりして女の反応を楽しんだ。

そして、両手の指を駆使してその部分を隠していた陰毛を左右に掻き分け押し広げ、女の中心部分を露わにした。

綺麗なピンク色をしていたその部分が男の指先で撚られる内に次第に充血始めたように映じられた。

「ガラクタ屋！石鹸を持ってこい！」

女の股間に悪さをしていた男が佐藤の方を振り向いて声を掛けた。

男に言われるままに、洗面器にお湯を張り、石鹸やカミソリやタオルを用意した。

そして、タオルを水で濡らして電子レンジで加熱するように命じられた。

蒸し上がったタオルを剥き出しの股間に押し付けた。

蒸されたタオルの熱さに女は身体をくねらせたが、男は構わず押し付け続けた。

蒸されてすっかり柔らかくなった股間の毛髪に石鹸水を塗りつけると、カミソリを押し当てた。

男が作業する股の間からゾリゾリと微かな音が漏れ聞こえ、上機嫌でカミソリを匍わせる男の鼻歌が流れ続けていた。

男が手を動かす度に、女の其処の部分の毛量は少なくなっていくた。

その光景を佐藤はジッと見詰め続けた。

その部分を覆っていた黒い毛が次第に失われ、白い地肌が露わになってくる度に、女としての尊厳が失われ、ただの生きている性人形に変化させられていく様に感じられた。

やがて全ての作業が終了し、すっかり繁茂を喪失したその部分を男は上機嫌で眺め、肉を押し広げたり、褌を捲って剃り残しが無いか確認した。

「どうでい！自慢の蛤が丸見えになったろう！」

柔らかく脂肪を溜め白く盛り上がった二つの丘を切り裂くように、縦真一文字に亀裂が割る様子を手鏡に映して項垂れる女に見せた。

女は自分の惨めな其処の有様を見せ付けられ、頬を染めて顔を逸らした。

そんな女の様子に満足したように笑い声を上げると、

「それじゃ、これから俺がお前の大蛤の料理をしてやるぜ！」

と、立ち上がり、台所に向かった。

冷蔵庫を開けて中をゴソゴソ探し回った。

そして、嬉しそうに口笛を鳴らして、ソーセージや竹輪や野菜を手にして戻って来た。

再び、人の字型で縛り付けられ、大きく開いた股の間に胡座をかいて座ると、其処の様子を繁々と観察した。

最後の盾も奪い去られ剥き出しとなった秘園から起ち昇る熟れた女の匂いを確かめる様に顔をその部分に近づけ、指先を柔らかな褌に触れさせた。

男の視線と鼻息が直接触れるその部分は、たちまち赤く充血を始め、男の意地悪な指先を避けるような仕草で焦れつつ腰を蠢かせた。

「ほらほら・・・クリちゃんがこんなに膨れ始めたぜ！全くお前も好きな女だぜ！」

男が股間に顔を寄せたまま口の端を歪めた。

突然、男が赤く熱をもった股の間に顔を埋めた。

伸ばした舌先で女の中心をいきなり嘗められ、女の身体に電気が走った様に立位に固縛された身体を仰け反らせた。

男は舌先を窄めて肉洞の内部に突き立て、舌先でその内部を搔き回して甘美な肉の旨味を味わった。

そして、指先で女の本物の芽を覆っていた包皮を優しく剥き上げると、固く屹立した部分に唇を押し当て、強く吸い上げた。

女は男の荒々しい行為に全身を朱に染め、ハァーハァーと息を荒げ、身体を震わせ続けて

いた。

女の甘美な花園の探訪に満足した男は、冷蔵庫から持ち出した太くて長い焼き竹輪の包装を破いて取り出し、それを男の唾液と女の樹液で濡れた肉の狭間に押し付けた。

その瞬間、女がビクッと身体をうねらせた。

男はやがて女が下の口で味わうこととなる練り物の柔らかさと長さを女に教えるように、割れ目に沿ってゆっくりとそれで擦り続けた。

女の身体から滲み始めた露により、焼き竹輪の表面が艶々と燦めき出す様子が映った。

女の反応に満足した男は花園の奥に佇む秘孔に、その先端を押し当てた。

女は普段口にする食物に犯されることを意識して羞恥に身体をくねらせた。

男は構わず、その太い竹輪をグイグイと肉洞の中に押し込んでいった。

半ばまで竹輪を没入させると、その出来映えを繁々と眺めて、「どうだ！男になったみたいだろう？」と、その部分を指さして大声で笑い上げた。

半分程体内に姿を隠した茶色く太い焼き竹輪は、女の肉の祠を破って前に突き出し、柔らかく下に向かって弧を描いていた。

大声で嘲笑する男の狼藉に抗議する気力も無いのか、頬を染めたまま体内に没入した柔らかな竹輪の感触を味わうかの様に腰をモジモジとさせていた。

男が面白半分に股間から突き出して緩やかに垂れ下がる竹輪の端を指で弾いた。

その衝撃が肉洞内に埋め込まれた残り半分に伝わったのか、ウッと声を上げて腰をくねらせた。

まるで身体の一部と化したような、小ぶりの男根の様な、秘裂から突き出したそれを上に向かって弾いたりして女の反応を楽しんだ。

「ジッとしていてもつまらないだろう？これから楽しませてやるぜ！」

男は竹輪の端を掴むと緩やかに前後に操作し始めた。

表面に焦げて襞を浮かべる柔らかな練り物が膣壁と擦れ合うことにより、女性の歓喜の源泉を刺激するのか、女は辛そうに眉根に皺を寄せ、固く唇を閉ざして、甘い啜り泣きの声を上げて異物が出入りするのを堪え続けていた。

「どうだ、良いだろう？」

男はゆっくりとした動きでその部分へ押し入れ抜き出しの往復運動を繰り返しながら女の

様子を窺った。

「おお！これはどうだ！」

男が驚きの声を上げた。

何時の間にか男の掴む竹輪の穴からネットリとした透明の樹液が糸を引くように溢れ出し
ていた。

佐藤も信じられない物を見る思いで、次々と甘露な蜜を滴り落とす竹輪の端を見続けた。

男はまるでポンプを押して井戸から水をくみ出すように反復速度を速めた。

男が突き立てる都度、夥しい量の淫液がピュッ、ピュッと先端の穴から噴出し続けていた。
甘美な疼痛にも似た切ない快美感が次々と股間から責め上がって来て、艶めかしい量感の
ある臀部を振り続けていた。

男の攻撃の前に汗の滲んだ顔を真っ赤に染め、苦しげに眉根をグッと寄せ、唇を噛みしめ
て、最後の瞬間を堪える風情の女であった。

次の刹那、女はウッと短く声を上げ、きつく顔を顰めて身体を硬直させた。

下腹部の筋肉が激しく収縮し、腹の中に収めた異物を喰い絞めるのが判った。

女の崩壊と併せる様に竹輪の先端の穴から、まるで男性の射精の瞬間の様に熱い樹液が激
しくほとばしった。

「この女、とうとう竹輪を食いちぎってイッてしまいやがったぜ！」

握っていた部分から先が無くなった竹輪を見詰めて呆れたような声を上げた。

「お前も昨日から何も食べて無いから腹が減ったんだろう？下の口で食べようとするとは
な！」

笑いながら掌で下腹をポンポンと叩いた。

一時の強い筋肉の収縮が治まり、弛緩して開き始めたその部分から、体内に呑み込まれて
いた竹輪の端が姿を現した。

やがてその姿は見る見る大きくなり、男の待ち受ける掌の中に塊を産み落とした。

佐藤も間近に寄って男の掌の中の愛液にビッシヨリと浸された竹輪の残骸を見詰めた。

「そんなに腹が減ったのなら下の口じゃ無くて上の口から食べさせてやるぜ！」

男は手の中の竹輪を絶頂に達し、今だに意識が朦朧とする女の口に無理矢理押し込んだ。

「どうだ？お前のスケベ汁が染み込んだ竹輪は美味いか？」と、大声で笑いながら尋ねた。

「次は、コイツだ！」

男は太いゴーヤを握り絞め女に向かった。

十分に潤っていた女の秘部であったが、最初の絶頂を迎え神経が鋭敏になったままの部分
を表面の凹凸が通過する際に刺激するのか、小さく悲鳴を上げ、ブルブルと腰を震わせ続
けた。

「おいガラクタ屋！お前はこれを使え！」

男が佐藤に向かってキュウリを投げて寄越した。

陰虐な女への責めに参加することを許された佐藤は、今や罪悪感や倫理観もすっかり忘れ
去り、満面に笑みを浮かべてハイと返事した。

人の字型に立位に縛り付けられた女の背後に回った佐藤はキュウリを握り絞め、双臀の間
に鎮座する菊の座を目指した。

それは、前の穴を太いゴーヤで責められるのに併せる様に、収縮と弛緩を繰り返していた。
まるでその部分で呼吸している様にピクピクと蠢くセピア色の菊花を血走った目で見詰め
る内に、心の奥底に秘められていた欲望が沸々と込み上げて来て、凶暴な衝動に支配され
た。

そして、淫靡に蠢く菊の蕾の中心にキュウリの先端をあてがうとグッと押して出た。

突然後ろからも挟まれた女がウッと呻き声を上げて身体を硬直させた。

そんな女の様子に魅せられ、肉の抵抗を楽しむ様にグイグイと力を込めて肛孔の奥深くま
でねじ込んだ。

半分程ねじ込み、その部分を観察した。

太いキュウリを頬張るように呑み込んだ淫花は、前方の淫門の動きに併せる様に物欲しげ
に蠢いている様に感じられた。

その淫らな景色に触発された佐藤は我を忘れて、握り絞めたキュウリを激しく動かした。

前門を責め立てるゴーヤと後門を激しく突き立てるキュウリの動きに女は立位に縛られた
まま引き攣った悲鳴を上げて身を振った。

女の扇情的な姿に刺激され、佐藤の男のモノは大きく上を向き、先走りの露を溢れさせて
いた。

前後から男に騷られる女の悲鳴が佐藤の獣欲を燃え上がらせ、頭の中は真っ白となり、無
我夢中で突き立て続けた。

二人の男の攻撃の前に堪らず、悲鳴の様な舌足らずの声を上げて絶頂を迎えた。

その瞬間佐藤のモノが爆ぜ、白くて粘い液が女の大腿を直撃した。

立位に固縛されたままの女が激しかった行為の跡を物語る様に天井からつり下がった縄に固定されたまま死んだように立ち尽くしていた。

大きく開股されたままの股間からは生々しい女汁が垂れ落ちていた。

二人は仕留めた獲物を品評するかのように、死んだように動かない女の身体の隅々まで見詰めていた。

ふと男は佐藤の股間が^{たくま}逞しく屹立したままなのに気付いて笑い声を上げた。

激烈な射精の後ではあったが、激しく燃え上がった佐藤の性欲は未だに冷めず、股間のモノは熱をもって膨張していた。

「おい！ガラクタ屋！そんなにやりたいなら好きなだけ抱いてみたらどうでい！」

「エッ？良いんですか？」

男の言葉に未だに肉欲がみなぎる佐藤は嬉しそうに問い返した。

「ああ、この女のミミズ千匹の、数の子天井のアソコを楽しんで見ねえ！」

天井からのロープに吊り下げられ死んだように動かなかった女であったが、股の間から醜い男のモノを鎌首を擡げさせながら近づいて来る佐藤の様子に怯えた表情を浮かべ、「お願い・・・もう許して・・・」と、小さな声を発した。

女の哀願を無視して、正面から女の身体をガシッと抱きしめた。

恐怖の色を浮かべた女の顔を目の前にして、込み上げる昂奮を押さえきれず、発作的に女の唇を奪おうとした。

女は嫌悪の表情を見せて顔を逸らし、重ね合わそうとした佐藤の唇から逃れた。

女の拒絶の態度に怒りが込み上げてきた佐藤は、平手で女の頬を殴った。

女が悲鳴を上げるのも構わず、不服従の罪を思い知らせる様に激しく叩き続けた。

佐藤の暴力に屈し、両目に涙を浮かべた女が、大人しく佐藤の唇を受け入れた。

力により女を征服する快感に燃えた佐藤は、舌を女の口内に突き入れ、相手の舌を巻き上げるように^{から}搦めた。

佐藤の暴力に怯えたのか、抵抗せずに佐藤の舌尖を迎え入れ、求めに応じて舌を絡め合った。

女の唾液の甘さが、佐藤の獣性を更に燃え上がらせた。

口接を続けながら両手で麻縄により括り上げられ前に突き出した乳房を思い切り握り絞め

た。

佐藤の握力に乳房が握りつぶされ、激痛のあまり口吻により声を出せない喉の奥から悲鳴が上がった。

今や獣欲に狂った佐藤は相手の表情など斟酌すること無く、乱暴な愛撫を続け、悲鳴を上げさせ続けた。

佐藤の熱を帯びた肉棒が其処に押し当てられた時、女の動きがピタと止まった。

拒絶の表情を浮かべても、未だに愛液に濡れ光るその女の門は柔らかく開き、佐藤の猛々しい肉塊を呑み込んで行った。

佐藤のモノがジワジワと押し入って来る刺激を受けて、唇を奪われて声を上げられない女はウンウンと鼻を鳴らした。

とうとう根元まで押し込み、女のスベスベした無毛の下腹と佐藤のモジャモジャとした陰毛の下腹が触れ合った。

佐藤は互いの股間を密着させたまま、その柔らかな感触を味わい、突き立てた陰茎から暖かく潤った極上の内部を堪能した。

しばし、下腹を相手に押し付け、得も言われぬ接触感を味わった後、温水で浸したベルベットの様な柔らかく気持ちの良い華洞に満足すると、更なる快感を紡ぎ出そうと腰をゆっくりと動かし始めた。

佐藤の腰の動きに併せ、それを喰い絞める肉の洞窟が妖しく蠢き柔らかく包み込んだ。

「どうだガラクタ屋！俺の言った通り良い道具を持っているだろう！」

二人の様子を面白そうに眺めながら男が声を掛けてきた。

「ええ！こんなに良い女、今まで抱いた風俗の女の中には一人も居ませんでしたよ！」

言葉の通り、情緒も無くただ事務的に性欲処理を済ませてしまう娼婦の何処か醒めた空虚な肉穴と違い、咽せるような女の色香を振りまき、熱く潤った肉洞で男のモノを締め付けてくる、かつて経験したことのない目眩く快感を与える女のその部分に、まるで杭を打ち込む様に激しく腰を使いながら感激した声を上げた。

夢中になって女に武者ぶり着く佐藤の様子を面白そうに眺め、手酌で酒をあおっていた男がノソリと立ち上がると、熱を帯びて汗を浮かべながら交あう二人に近づいた。

そして女の背後に回ると隆々と天を向く怒張を女の菊の座に宛がった。

熱鉄の様な隆起が後門を貫いて進入して来る痛みに、女は激しく首を振って悲鳴を上げ続

けた。

女の背後から挿入して来る男の逞しいモノに加勢を得たように、前方から突き立てる佐藤のモノは、限りない喜びを提供してくれる極上の華洞の中で凶悪に膨張し、一層その硬さと太さを増した。

男二人にサンドウィッチにされ前後から激しく攻め立てられ女は狂った様に身悶え続けた。佐藤もこれまで何回も射精し身体が軽くなった為か、これまで体験したことの無い性の世界に触れて体質が変貌したのか、自分でも驚く程長く耐え、背後から突き立てる男と調子を併せて腰を使い続けた。

残虐な男達に前後から責め立てられ、女は白目を剥いて、泡を浮かべるだらしなく開いた口から声にならない悲鳴を上げ続けた。

疲れを知らない二人の男に挟まれ、何度も無理往生させられたが、淫虐な男達は、女から性の快感の最後の一滴^{ひとしずく}まで搾り取ろうとするかのように、手を緩めること無く責め続けた。

床の上に全裸の女が横たわっていた。

身体を縛っていた全ての縄は解かれていたが、意識は完全に喪失しており、激烈な性交痛の名残りの様に時々ピクリピクリと身体を痙攣させていた。

男達から一方的に加えられた痛烈な性交の余韻を示して、胸は激しく上下し、陸に打ち上げられた魚のようにパクパク開く口からは忙しく荒い息が漏れていた。

疲労感で自分では閉じ合わせる力を失った股間は、酒を酌み交わす二人の男に向かって大きく開いたままで、ほんのりと赤や青の血管を浮かび上がらせた白い肉感的な太腿の間のほの暗い合わせ目に息づく二つの穴はすっかり弛緩し、ポカリと開いたままの肉の洞窟からは男達が置き土産としたものがドロドロと流れ出ていた。

そんな女の様子を楽しそうに眺めながら、

「ガラクタ屋！面白かったな！次は何をして甚^お振ろう？」と、傍らに腰を降ろす佐藤に問い掛けた。

「それじゃ、こう云うのはどうですか？・・・」と、言いかけると、続きは女に聞こえないように男の耳元に顔を近づけて何かを囁いた。

その佐藤の言葉に驚いた表情を浮かべた男が、「おい！ガラクタ屋！いくら何でもそれはや

り過ぎじゃ無いか？」と驚いた顔で声を発した。

男の呆気にとられる様子を面白そうに眺めた佐藤は、

「旦那も未だ未だですね・・・女を責めるのにそんな甘いことを言ってちゃ駄目ですぜ・・・」
と、残忍な笑みを浮かべてうそぶくのであった。

完